様式第２号

平成２５年度　　地 域 貢 献 特 別 研 究 費 実 績 報 告 書

平成２５年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>教授</td><td>氏 名</td><td>谷口　敏代　　印</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="6">職場環境が介護職員のワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響　～日本と韓国の比較を通して～</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="6">30 万円</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td>専門分野</td><td>役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>谷口敏代</td><td colspan="2">保健福祉学部・教授</td><td>介護福祉</td><td>調査及び分析の統括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>趙　敏廷
原野かおり
藤井保人</td><td colspan="2">保健福祉学部・講師
保健福祉学部・准教授
保健福祉学部・准教授</td><td>介護福祉
介護福祉
産業医学</td><td>調査及び分析（*育休中）
分析
分析</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要
（地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）</td><td colspan="6">＜目的＞高齢社会に到達している日本と高齢化の道を歩んでいる韓国共に、介護サービス従事者への期待は高く、質の高いケアを提供することが求められているが、職場環境が整っていない現状がある。介護サービスに従事している職員に焦点をあて、ワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響を明確にし、類似点と相違点を分析し、介護職のキャリアアップ及び人材確保の手だてを探ることを目的とする。
＜調査方法と対象＞
調査対象及び手続き：資格確保までの修学時間が類似している日本のホームヘルパーと韓国の療養介護士を対象とした。ホームヘルパーは、岡山県保健福祉施設・病院名簿（平成25年4月1日現在）に掲載されている特別養護老人ホームから30施設を無作為抽出し，1施設当たり10人分の調査票を郵送で配布し、施設長から依頼されたホームヘルパーは個別に用意したのり付き封筒を厳封し、各自に郵送を依頼した。韓国は、協力が得られた療養保護施設5施設に従事している療養保護士300人を対象に留め置き法で調査を行った。施設長から依頼された療養保護士は個別に用意したのり付き封筒に厳封し、施設単位で回収し，調査代表者である谷口に郵送を依頼した。
調査期間：　韓国；平成25年10月～11月　　日本；平成25年12月～平成26年1月
調査票：年齢、性別、婚姻の有無、最終学歴、雇用形態、就業年数、実質的な労働時間、仕事継続意思、健康状態、職業性ストレス（JCQ22項目版）、ワーク・エンゲイジメント、貢献感、疲労感、うつ気分（k6）、睡眠の質、対人関係から構成される。それぞれの日本語及び韓国語版尺度使用許可を得た。
倫理的配慮：両国の調査対象施設及び調査対象者には、調査目的を文書で説明し、個人や</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要 （地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）	施設の匿名性が確保されること、調査以外には使用しないこと、調査成果を公表すること、記入後返信することで調査協力の承諾に変える旨を文書で説明した。岡山県立大学倫理委員会（No.342）にて承諾を得た。 調査票の回収状況：日本は81名（27.0%）、韓国は243名（81.0%）から回収。 分析方法：分析毎に欠損値を除外し、日本と韓国の比較は、カテゴリー変数はχ2検定、連続変数はMann-WhitneyのU検定を用いた。ワーク・エンゲイジメントを従属変数とし、年齢、就業年数、仕事の要求、仕事のコントロール、職場の支援、貢献感、疲労、睡眠の質、対人関係を独立変数としたステップワイズ法による重回帰分析を、日本、韓国それぞれで行い関連要因を抽出した。 ＜結果及び考察＞ 　対象者の性別では、男性の占める割合は、日本では28.4%、韓国では5.0%であった。平均年齢は日本36.3歳（SD11.8）、韓国54.4歳（SD5.9）、平均就労年数は日本3.4年（SD3.1）、韓国2.1年（SD1.9）、雇用形態は、日本では正規社員が77.8%、韓国は41.5%で、それぞれに有意差が認められた。交替勤務の比率は、日本が82.5%、韓国78.8%で有意差は認められなかった。健康状態では、介護職に多く認められる身体の各部位（首・右肩・左肩・右ひじ・左ひじ・右手首または手、左手首または手、腰、右ひざ、左ひざ）の過去1ヶ月で１日以上続く痛みを聞いた。最も多かったのは、腰の痛みで、日本の67.6%、韓国の75.1%が痛みがあると記述されていた。その他の痛みの部位で、対象者の50%以上の人が訴えていたのは韓国で、右肩（73.1%）、右手首または手（63.2%）、左肩（62.7%）、左手首または手（53.5%）の順であった。 　仕事の要求、仕事のコントロール、上司の支援また、疲労感は日本が韓国より有意に高く、ワーク・エンゲイジメント、貢献感は韓国が有意に高かった。ワーク・エンゲイジメント平均得点は、日本2.67（SD1.23）、韓国3.83（SD1.18）と韓国が高かった。自己主張や自己表見に対する謙虚さなど文化的背景が指摘されているため、単純な比較はできないが、日本は他国に比べワーク・エンゲイジメント得点が低いことが報告されている（Shimazu, Schaufeli et al, 2010）。ステップワイズ法による結果を表に示した。ワーク・エンゲイジメントに影響を与えていたのは、日本では、疲労感と貢献感が、韓国では疲労感と貢献感に加えて同僚の支援と仕事のコントロールであった。ワーク・エンゲイジメントは仕事に関するポジテイブで充実した状態である。両国共に、腰痛や肩の痛みを生じることがないような介護技術の習得や福祉機器の活用により疲労を生じさせない工夫、介護に従事することに誇りがもてるような職場環境作りが求められる。また、韓国の療養保護施設と日本の特別養護老人ホーム共に、要介護度の高い高齢者に質の高いケアの提供が求められ、日本、韓国共に介護職への期待は大きい。しかし、韓国では、長期療養保険制度の歴史が浅く、非現実的な人員配置や不当な業務指示等が報告され療養保護士のモチベーション低下が指摘されている（蘇,2011）。介護の専門職としての仕事の裁量や職員同士がサポートしやすいような仕組み作りが示唆された。 表　日本と韓国におけるワーク・エンゲイジメントを従属変数としたステップワーズ法による重回帰分析

	日本				韓国			
	非標準化係数		標準化	p	非標準化係数		標準化	p
	偏回帰係数	標準誤差	偏回帰係数		偏回帰係数	標準誤差	偏回帰係数	
（定数）	17.454	5.336			1.408	6.45		
疲労感	−0.628	0.128	−0.455	0.000	−0.587	0.101	−0.35	0.000
貢献感	0.935	0.25	0.348	0.000	0.688	0.132	0.324	0.000
同僚支援	―	―	―	―	1.188	0.432	0.167	0.007
仕事のコントロール	―	―	―	―	0.205	0.079	0.159	0.011
	R^2=0.418　調整済みR^2＝0.402				R^2=0.393　調整済みR^2＝0.379			

成果資料目録	なし